



1)「おいしいお茶は霧が育てる」とも言われますが、この地域では季節の変わり目には「八合霧」が発生します。「八合霧」とは、寒暖差が激しい朝に谷川から山肌をはい上がるよう にかかる霧(雲海)のこと、この「八合霧」によって、甘みと渋みのバランスがとれたおいしいお茶を収穫することができます。

2)山の神に感謝しながら、丁寧に手摘みされる秘境のお茶



「お茶をつかむなりやノーホイノーホイ  
　　へお茶をつかむなりやノーホイノーホイ  
　　三度におつみ 根葉に天葉に  
　　まわりづみ シヨンガエー」

この唄を口ずさみながら、その昔から祖谷 の人々の手仕事で育まれてきたお茶。「静岡の お茶も、もとはと言えば、祖谷の茶の苗が東 海道を旅して届けられたもんよ」と、そんな 話も語り継がれてきました。

かつて、この地には七組合の工場があり、「有瀬茶」は紙袋に詰められ出荷されていました。その後、旧西祖谷の役場が率先して「かずら橋茶」というブランド名もつけられたそうで

川霧が立ち昇り、南に向いて山上の太陽が 降り注ぐ、清らかな気に満ちあふれる大歩 危祖谷は、良質なお茶の産地でもあります。 山の自然が育んだ健やかな味が体に心に染 み渡ります。

なかでも「有瀬茶」や「山城茶」は、おいしい お茶として知られ、地元のみならず近隣の 人々にも愛飲されてきました。

川霧が立ち昇り、南に向いて山上の太陽が 降り注ぐ、清らかな気に満ちあふれる大歩 危祖谷は、良質なお茶の産地でもあります。 山の自然が育んだ健やかな味が体に心に染 み渡ります。

清らかな気に満ちて

川霧が立ち昇り、南に向いて山上の太陽が 降り注ぐ、清らかな気に満ちあふれる大歩 危祖谷は、良質なお茶の産地でもあります。 山の自然が育んだ健やかな味が体に心に染 み渡ります。

茶摘み唄の里「有瀬」

高知県境に近い「有瀬」は、祖谷隨一のお茶

の産地。南に向かって吉野川を見下ろす眺望

は、息をのむほどに美しく、朝の光を浴びて茶

畑に立つと、隠れ里に住む幸福感にふれるこ

とができます。

この地で代々、お茶づくりに励んできた平

松さんは、茶畠のみならず製茶工場も営んで

います。「製茶工場」というても、おやじの代か

らの素朴な機械やから人の手に頼つとんの

よ。微妙なんぱいを調整するのは、やっぱり 手加減。手のみに近いお茶よ」。

民謡の宝庫祖谷には「茶もみ唄」が伝わり ます。

「お茶をつかむなりやノーホイノーホイ  
　　へお茶をつかむなりやノーホイノーホイ  
　　三度におつみ 根葉に天葉に  
　　まわりづみ シヨンガエー」

今や妖怪で知られる「山城」地区。この地の

お茶も昔から有名で、明治初年から道中の苦

労を乗り越え、はるばる阪神地方に販売され

た歴史があります。まだ三名村時代の昭和五

年には祖谷の人々にも呼びかけて、「祖三製

茶販売利用組合」が設立され、いち早く製茶

工場を建設しましたが、台風で倒壊。戦後の昭

和三十二年になって、「三名村農業協同組合」

の工場が小学校の旧校舎を利用して完成し

ました。やがて、農協から独立する形で茶業組

合が設立され、現在の「山城茶業組合」の歴史

につながります。その組合からは、山城名物の

「妖怪茶」も誕生しました。

山城茶業組合の立ち上げに当初から関わ り、現在は会計理事を務める川内さんは、四 国の秘境山城大歩危妖怪村の理事でもあり ます。その庭先には、妖怪ならぬ都からやって きたというお嬢さまの祠があります。吉野川 の上流と下流が見渡せるここは、昔から旅の 重要拠点。山城のお茶は旅人のかわいた喉を 潤し、そのおいしさが日々に伝わったことと でしょう。



## Σ 山の名物 天空に香るお茶ものがたり

Local specialties  
of a mountain

